

國學院大學學術情報リポジトリ

Recitation of Ceremonial Verses : Dialogical
Singing in /Huanjia-yuen/(還家愿) Initiation
among the Yaos of Lanshan, Hunan Province

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Hirota, Ritsuko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000053

儀礼における歌書の読誦

— 湖南省藍山県ヤオ族還家愿儀礼に行なわれる歌問答 —

廣田律子

はじめに

本稿では、中国湖南省藍山県に居住する過山系のヤオ族に伝承されている通過儀礼の還家愿儀礼において行なわれる救世主盤王への祭祀の場面（盤王愿儀礼）で読誦される歌書とその歌唱に関する報告を行なう。読誦には、漢字文献が使用されるが、七言上下句が対をなし四句をまとまりとして構成される定型の経文である。定型経文の内容は、ミエン・ヤオ族のアイデンティティーの根幹をなす神話や歴史叙事、儀礼の執行内容や

祭司として守るべき教訓、口承の記録等多岐にわたるが、単なる道教からの借用ではないヤオ族独自の信仰知識が凝縮され、対句や反復や多義の比喩表現が用いられている。漢字は漢語読みされるのではなく日常使用されるミエン語や漢語とは異なるヤオ族独自の音調が付され経文によっては異なるリズムと旋律を付され読誦歌唱される。儀礼の実践では経文を文面通り読誦するだけではなく、口承と書承部分を混在させたり、掛け合い特に問答形式が多用されており、読誦歌唱法を大変複雑にしているが、独自の歌唱システムが存在し、それは祭司によって伝承され続けている。

中国の少数民族の歌謡に関する研究は近年急速に進展してきている。特に日本の古歌謡研究を基礎にする日本人による研究が牽引役を果たしているといえる。^①

フィールドワークによる一次資料の収集が進められ、相互に比較研究を進める条件も整い、中でも歌垣の研究は多くの成果が報告されている。折口信夫の問答歌に対する解釈を中国の事例に展開できるか否かを論ずる研究、音数律に着目してアジア全体の視座からの研究も見られる。中でも辰巳正明は、歌謡を大歌と小歌とに分類し、大歌は儀礼的な場、小歌は私的な場で歌われると解釈する（万葉集の歴史 二〇一頁）。そして大歌について『万葉集』の事例を示した上、祖先神の物語が叙事大歌として伝承され、民族の歴史を歌うのが大歌であり、祭祀において、始祖神の物語が大歌を通して人々の前に表わされるとし（万葉集の歴史 二二五頁）、さらに中国の侗族の大歌の儀礼的性格にも言及している（万葉集の歴史 二一九～二三三頁）。古歌や大歌と称される創世記や民族の起源や歴史に関する叙事歌が儀礼の中でどのように歌われているか、儀礼の実践と接合させた報告を試みることで、辰巳正明の論を基礎としさらに展開できるのではないかと考える。

本稿では中国少数民族のヤオ族の儀礼の場で、儀礼の執行に

において民族の起源や歴史の記された経文（歌書）がどのように読誦歌唱されるのか、中でも定型の経文が問答形式で歌われる例に着目し、祭祀歌謡の特性まで踏み込んで考察したい。

一、調査地域と調査儀礼

ヤオ族は中国の湖南省・広東省・広西チワン族自治区・貴州省・雲南省・ベトナム・タイ・ラオスの山地に分布し、中国では言語や文化の上で異なる集団がヤオ族とまとめられて称され、約二六〇万人の人口を有する。本報告は湖南省の西南に位置し広東省に隣接する藍山県に居住する過山系ヤオ（ミエン）族を調査対象としている。過山系のヤオ族は焼畑耕作を主な生業とし、犬祖神話と渡海神話を伝承し、男性は宗教職能者としての資格を得る通過儀礼を行なう点等に特徴がある。藍山県は約一八一平方キロメートルの面積で、三五万人の人口（二〇〇五年現在）のうち漢族が大半を占め、ヤオ族は約二パーセントにすぎない。藍山県には一五郷あり、そのうち六郷にヤオ族が衆居する。

藍山県の滙源郷湘藍村の祭司が行なう儀礼ですでに調査を行なったのは、祭壇に神像画の描かれた軸を掛けて行なう還家愿

儀礼（祭司になるための儀礼および願ほどの儀礼）、度戒儀礼（祭司の最高位を得るための儀礼）、道場儀礼（葬礼）のほか、治病のための儀礼、符を授ける儀礼、神像画に魂入れを行なう儀礼、年中行事の春節および除災招福を目的とする送船儀礼等がある。そのほか建築の日取り等吉日を選ぶ場面にも出会った。時期にもよるが、祭司の家で聞き書き調査を行なっている日に何回も儀礼を依頼する電話がかかってくる状況である。「ヤオ族文化研究所 二〇一・八〇〜九一頁」。

ヤオ族の儀礼は、その規模の大小にもよるがテキスト（經典）の読誦と口頭による唱えごと、発行される文書「丸山 二〇一〇、二〇一一」、マジカルなステップ（うは、マジカルな手の表現（手訣）、符の作成、舞踏等を重要な構成要素として成立している）。

儀礼の進行に欠くことのできないテキストは、漢字で表記され、通過儀礼に関する写本、儀礼の式次第を記した写本、儀礼に用いる文書類の凡例を取めた写本、神々を崇拜する神歌に関する写本、神々の呪文に関する写本、符・罡歩・手訣を解説する写本、吉日を選ぶ暦、祭司の受礼の状況を記したものが含まれ、内容からは符書・賞光書・伝度書・請聖書・意者書・歌堂書・超度書・暦書等のジャンルに分類できる「神奈川大学大

学院歴史民俗資料学研究所 二〇一・四七〜五六頁」。

二、還家願儀礼

儀礼の主題を明確にするために、藍山県所城郷幼江村の盤家において二〇一一年一月一日〜一月二一日（旧暦一〇月二一日〜二六日）に行なわれた還家願儀礼を事例とする。盤家の跡継ぎである盤栄富とその妹婿の盤明古、そして盤栄富の父の妹の夫である盤林古（故人）とその子で栄富にとつてはいとこである盤継生・盤認仔・盤新富の三兄弟、計六名が受礼者となり祭司となる法名を得、家を継ぎ先祖の祀りを行ない、自分も家先単に加えられ祀られる資格を得るために行なわれる掛三灯儀礼が中心となる。さらに盤家では一九三〇年代に流行病によつて七人が亡くなる不幸があり、その時に願を掛け、二〇一一年にも願を掛け願ほどの儀礼を行うことを約束したので、願掛けが成就したことに対する願ほどの儀礼、さらなる願掛けの儀礼、さらに盤王を祀る儀礼が行なわれる。三人の祭司が招兵師・還愿師・賞兵師・掛灯師と称し、その弟子たちと共に役割を分担し、祭祀を行なう。そのほか子供物を準備し、儀礼の段取りを取り仕切る主厨官、文書作成を担当する書表師、歌

を担当する歌娘、若い男女三名ずつの三姓単郎と三姓青衣女人、はやし方の笛吹師・鑼鼓師等の役割がある〔神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 二〇一二・二三―一六頁〕。

祭場は盤栄富宅の庁堂において行なわれ、入口入って正面右側に盤栄富の先祖を祀る常設の祭壇（家先壇）があり、中央に祭壇がしつらえられ、壁には元始天尊の左右に道德天尊、靈宝天尊を配し、この三清を中央とし、左に聖主・太歳・十殿・李天師・地府・大海番・海番張趙二郎・把壇師、右に玉皇・総壇・張天師・三將軍・天府・監齋大王の神像の描かれた一七種二二軸が掛けられる。祭儀の進行に従って、先祖を祀る壇には紅紙の切り紙が掲げられたり、七星姐妹を祀る祭壇や開天門の儀礼を行なうための場等が加えられる。祭儀の後半の盤王を祀る儀礼の祭壇は前半と一変し、神像画の軸は外され、正面に盤王を象徴する紅紙を切り抜いた紅羅緞が貼られ、丸ごと豚一頭が供物として並べられ、その上にちまきが置かれ、切り紙の花旗が挿される。

三、還家愿儀礼の程序

神像画の軸を掛けて行なわれる儀礼の度戒儀礼・還家愿儀

礼・葬送儀礼は、規模の大小はあるものの儀礼の骨格をなす基本構造は一致し、祭司が祭場の準備を整え、開始の酒を飲み、祭司の資格を告げ、神を招き、祭司の師匠の助けを求め、神に祭りの目的等を伝え、神を喜ばせ、叙任の儀礼を行ない、神に紙銭等を献上し、願掛けをし、願ほどきをし、神を送り、師匠に感謝し、ねぎらいの酒を飲み終了する構成を取る。それぞれの儀礼の目的に合わせ、この骨格に特徴ある肉付けがなされる〔廣田 二〇一三b:1―二五頁〕。

中規模の儀礼に位置付けられる還家愿儀礼だが、全体の儀礼執行の程序を表にして示す。

還家愿儀礼程序表

日付	大儀礼名	内容
一月一六日	落兵落将	祭司各自が連れて来た陰界の兵を施主の家先壇に入れる。
一月一六日	脱鞋酒	祭司と施主と厨官が酒を飲む。
一月一六日	做紙馬	神に献上する紙銭作り。
一月一六日	石鑿銭酒(做紙酒)	さらに手伝いの人も交え酒を飲む。
一月一六日	写愿簿	家先単作り。
一月一六日	紙馬進堂	祭司が紙銭を家先壇に置く。
一月一六日	落脚酒	祭司および受礼者、厨官、歌女等が酒を飲み、祭司は自身の資格、儀礼の趣旨説明を行なう。

一月一六日	掛聖	神像画の軸を掛ける。
一月一六日	冷排蓋	厨官が供物盆を出し礼拝。
一月一六日	点香	厨官が線香灯明を家先壇に供える。
一月一六日	羅鼓開始	はやし方の鳴り物が始まる。
一月一六日	恭賀主家	祭司から施主への祝金が準備される。
一月一六日	昇香	厨官が祭壇を整え、祭司が線香を壇に供える。
一月一六日	安祖先(安家先)	分家に香炉を分け祖先を迎える。
一月一六日	接外祖	妻方の祖先を迎える。
一月一六日	写家先対聯	書表師が対聯を準備する。
一月一六日	請聖	祭壇に神々を招聘し、儀礼の目的、経過、式次第を説明。祭場を清める。
一月一七日	倣紙馬	紙銭作り。
一月一七日	添香	厨官が線香と灯明を供える。
一月一七日	準備五穀幡	五穀幡を準備。
一月一七日	入席	はやし方が演奏。
一月一七日	請聖	神々を祭壇に招聘し、儀礼の経過、式次第を説明。
一月一七日	封斎	斎戒の開始。
一月一七日	掛家灯	宗教職能者となる通過儀礼。
一月一七日	入席	はやし方が演奏。
一月一七日	倣紙馬	紙銭作り。
一月一七日	開壇還愿	神々を招聘しあらためて願が伝えられる。壊れた盆を修復し再び陰兵の受け入れができるようになる。願ほじぎが行なわれる。

一月一八日	招兵愿	神像画を招き、五穀豊穣を祈願して行なわれる。
一月一八日	入席	はやし方が演奏。
一月一八日	招兵愿	天の門を開き神兵を招き、五穀豊穣を祈願して行なわれる。
一月一八日	還招兵愿	兵を楽しませるために行なわれる。願ほじぎが行なわれる。
一月一八日	大運錢	献上される錢が届けられる。
一月一八日	送孤神	孤神を送る。
一月一八日	鑿牲	豚を犠牲とする。
一月一八日	謝師	師匠に感謝する。
一月一八日	鑿香	線香を供える。
一月一八日	収聖	神像画を片付ける。
一月一九日	盤王愿	盤王に感謝し行なわれる。
一月二〇日	盤王愿	盤王に感謝し行なわれる。願ほじぎが行なわれる。
一月二〇日	拝師	師匠に感謝する。
一月二〇日	散袱酒	祭司、歌娘、厨官等がテーブルに着き、それに対し受礼者が礼拝。
一月二〇日	散袱拝師	祭司に対して受礼者が礼拝。
一月二〇日	唱賀歌	歌娘が歌い言祝ぐ。
一月二一日	分紅	厨官が肉を分配。
一月二一日	拆兵	祭司は家先壇から自身の兵を取り戻し、帰り支度をすする。
一月二一日	奉倉庫	倉庫を作る。
一月二一日	上馬酒	最後の酒盛り。

四、儀礼盤王愿の実践

本稿では還家愿儀礼の後半において行なわれる大儀礼名「盤王愿」部分を取り上げ、儀礼の実践と読誦される文献の内容について解説を加える。

十一月一日から二〇日に実施された大儀礼名「盤王愿」部分の儀礼執行程序のうち重要な箇所を取り上げ以下に示す。

一、(一九日七時四五分頃) 庁堂正面に祭壇をしつらえる。祭壇の様子は、紅紙の切り紙(上から柱菌・石榴花・大紅花・荷花・盤王印・天狗・香炉)、その下に黄紙の切り紙(金魚)が貼り付けられたものが正面に飾られる。その両脇に紙銭がつるされている。

供物は、豚の頭部に脂の膜がかぶせられ、その上に盤王の塩信・碗の灯明・箸の束が置かれる。頭部の両脇には内臓、その脇に胴・足が置かれる。右に二足、左に一足、胴の上はちまきに覆われ、ちまきには色とりどりの切り紙の旗が挿してある。さらに正面には背骨と一足がつるされている。血の入った桶は右に置かれる。

豚の頭部前には、左右に三つずつの碗、中央に香炉碗、左右

に米の入った碗・水杯・塩の入った杯が並べられる。

二、(八時二〇分頃) 主厨官が祖先壇に線香をとす。

三、(八時二〇分頃) 「剪花酒」を行なう。庁堂に祭司とその弟子、歌娘、主厨官がテーブルを囲み着席し、祭司が盤王愿を行なう施主盤家の願掛けの経緯、願ほどの実施内容等を説明する内容の「意者」を暗唱する。招聘する神名および祖先の名を唱える。³⁾ 神々に献酒後皆で酒を飲む。

四、(二〇時頃) 祭司は祭壇前で「意者」を暗唱する。

五、(二〇時一〇分頃) 祭司は祭壇前で「請盤王」を行なう。この時招聘する神名と神についての叙事文を暗唱する。

六、(二〇時三〇分頃) 祭司は祭壇前で献酒および献紙銭し、足りたかどうかト具で確かめる。

七、(二一時三〇分頃) 祭司は「意者」を暗唱し、神が受け取ったかどうかト具で占う。

八、(二四時一〇分頃) 祭司は神名を暗唱。神々を招聘するため紙銭三十打を献じる。

九、(二四時一五分頃) 「流楽」が開始される。祭司はト具で占った後、經典の「点男点女過山根(文献Z-15)⁴⁾ 箇所が読誦される。

一〇、(一四時二五分頃) 「陰声保、陽声氣」とされ、祭司



図1 三姓青衣の女性が立ち並び、歌娘（右座）は歌う

一四、（一六時五分頃）弟子たちは祭壇前で鍛冶屋が橋を架けるため

一三、（一六時）祭司は戸口のところ内外に別れて問答（1）を行ない、内は紙銭の金を払い、外は贈り物を表わす
楽器（長鼓・笛・沙板・角笛・鈴）を送る。

一一、（一五時一五分頃）祭司により上光儀礼が進められる（文献Z-32aを読誦）。
一二、（一五時五〇分頃）祭司は文献Z-26を読誦。

は神の声かわたされ歌詞が引き出されたかト具で占う。この時男女が歌う歌の題が表明される（文献Z-15を読誦）。米が撒かれ、神声かわたされたことを表わし、歌が開始される。歌娘は文献Z-29を読誦歌唱する。三姓青衣の女性は祭壇前に並ぶ。

の工具を作る様子を演じる。木を切り製材し橋を作る様子を演じる。

一五、（一六時一五分頃）祭司は手訣で陰兵を派遣し三廟に至る橋を架けることを表わす。ト具で占い、橋が架かったか判断する。

一六、（一六時二〇分頃）玉簡は橋を表わし、弟子は橋を平らにする等演じる。文献Z-26を読誦。

一七、（一七時一〇分頃）祭司は神々に献酒を行ない、文献Z-26・『善果書〇乙本』（文献Z-16）を読誦。

一八、（一七時五五分頃）祭司は戸口で内（女性を演じる）と外（男性を演じる）で文献Z-15および文献Z-26を使用し問答（2）を行なう。

一九、（一八時二〇分頃）外から人を室内に招き入れ酒を勧める。

二〇、（一八時三〇分頃）主厨官等が「做鼓」「置鼓」「試鼓」を演じ、祭司は『善果書〇乙本』（文献Z-16）を読誦する。

「試鼓」の時祭司は問答（3）を行なう。主厨官は長鼓をもち舞う。舞の動作は飄洋過海の神話や祭祀の内容、焼畑、儀礼、家作り等を表現する。

その後祭司が「聴鼓」「唱歌堂」を『善果書〇乙本』（文献Z-16）を誦し表現する。

二一、（一八時四〇分頃）祭司、歌女は戸外に出てそれぞれ『善果書〇乙本』（文献Z-16）・Z-29を誦する。三姓青衣の女性三名三姓単郎の男性三名は対面して並ぶが、その間を弟子は八字に回り唱歌堂を意味する。

二二、（一八時五〇分頃）祭司は祭壇正面で『善果書〇乙本』（文献Z-16）を誦し、誦前に神名があがるごとに、弟子は箸で祭壇上から卜具を床に落とし、神に対して供物の数を数え確認したか満足したかを占う。

二三、（一九時二五分頃）祭司は脱童の儀礼を行ない、『善果書〇乙本』（文献Z-16）を誦す。

二四、（一九時三五分頃）祭司は師父に感謝する。

二五、（一九時四五分頃）祭司は神々を招聘し、約束した紙銭を献納する。供物（おかず・酒等七組）を献納する。数を数え確認したか、食べたか卜具で占う。

二六、（一九時五〇分頃）祭司は請盤王の声音で歌唱し、神の声（劉三妹娘の声）と歌詞を引き出す。紙銭を献する。

二七、（二二時三〇分頃）「唱盤王大歌」が開始され、祭司は祭壇前で「意者」を暗唱したのち『大歌書一本上冊』⁽⁶⁾（文



図2 『盤王大歌』を歌唱する祭司たち

献Z-19）を誦する。「三幡」部分は唱える。『大歌書一本上冊』の本文は、冒頭は問答形式（4）で誦する。それが終わると祭司二人で左右の頁を分担し誦が進められる。

「洪水沙曲」を初めとする「曲」がはされまれるがこの時は誦のメロデーが変わる。「曲」に入る前主厨官が線香を献じ、祭司が沙板を鳴らし、問答（5）がある「曲」の調子を合わせるために「拉里連郎里拉利…」を歌い「曲」の誦が始められる。

「曲」が終わると『大歌書一本上冊』（文献Z-19）の本文部分に戻るが、初めの数頁は問答形式で誦される。

二八、（二〇日三時頃）祭司が歌娘に鈴を与え「四廟歌書」（文献B-2）「四断完了又接鈴歌語」を誦し、次に歌娘が祭司に鈴をわたすと、祭司は『大歌書上冊』（文献

Z-19)「接鈴用」を読誦し、歌娘の歌を評価する。

二九、(四時四〇分頃) 祭司は『大歌書一本下冊』(文献Z-20)を取り出すために問答(6)を行なう。

三〇、(五時一五分頃) 『大歌書一本下冊』(文献Z-20)

の初めは問答形式で読誦。「又何物段」部分は全部問答(7)で構成されている。

三一、(一〇時五〇分頃) 祭司は神々への供物(内臓・紙銭・鈴・碗・箸)を船に積み込む。

三二、(一〇時五五分頃) 戸外で三姓単郎三人三姓青衣女人三人は対面して並ぶ。歌娘と男性歌手は「遊愿」の読誦を続ける。

三三、(一一時四二分頃) 「打令放船」では、主厨官が心臓の入った碗を運び、酒と箸を並べる。祭司は杯を倒し酒をこぼす。『大歌書一本下冊』(文献Z-20)「解開船櫓放船去」の内容の読誦を続ける。

三四、(一一時五二分頃) 退席は祭司により文献Z-15が読誦されるが問答形式(8)で、片付けることを神々に知らせる。

三五、(一四時一〇分頃) 「送王」で祭司はまず神々を招聘し、献酒を行なう。

三六、(一四時三五分頃) 祭司は神々に約束した紙銭を献

上し、足りたかどうかト具で占う。「做証」してくれたあととあらゆる神々や師父、関係する神霊に対して銭を献じる。「拆愿」は、すべての願ほどこきを完了させるために願掛けの証書を消却させる。

三七、(一五時五分頃) 祭司は神々に繁栄と五穀豊穡、家畜の増殖、金銀財宝を願う。瘟神、災殃、傷神、耗、七精八怪等の害をなすものから守ってくれるように願う。

三八、(一五時八分頃) 祭司は献酒を行なう。

三九、(一五時一二分頃) すべて紙銭が燃やされ神々に届けられる。祭司は納めたかト具で占う。

四〇、(一五時二四分頃) 祭司は米を撒き、神々を送り去る。

四一、(一五時二五分頃) 祭司は戸外に香炉と水杯を持ちだし、伏せて中身を出し、練香で符を書き、「送王」を終了する。

五、問答の実践

数多く見える問答形式のやり取りと歌を取り上げ、問答(1)から(8)の具体的内容を以下に示す。

問答(1)の内容は、

どこから来た
 鉄の産地の塘村から来た
 何しに来た
 工具(刀、斧刀等)を作りに来た
 いくらかかる
 七千八
 八万七千だろ
 何しに来た
 お祝いに
 何をもって来たのか
 牛、鴨、鵝をもって来た

である。

状況としては、歌堂が催されると聞きつけ、鉄の産地の塘村から神々が訪れるのに橋を架けるために必要な鉄製工具を作り、さらに供物となる品々を携え祝いにやってきた来訪者と歌堂を催す家の者との問答である。七千八万と言いつつ来訪者と歌堂七千と直し、そこで笑いを誘う。問答の最後には内からは銭、外からは贈り物が交換される。さらに来訪者が招き寄せられると、文献Z-26に「行到州門開鉄舗 行過県門得日焼(行きて州門に至れば鍛冶屋を開き、行きて県門を過ぎれば日焼を得る)」とあるように鍛冶屋を開く。ドラを伏せた上に鉄の焼き入れに使う水を表わす杯、炬を表わす碗を置く。笛でふいごを



図3 弟子たちが鍛冶屋となり橋を架ける工具を作る

わし、牛を殺し土地神を祀ることを表現する。板を組み合わせたカスターネットのような沙板で鴨を表わし、ドラで鶯鳥を表わす。紙銭を燃やし土地神を祀る。笛を天秤ばかりに見立て、牛に見立てた牛角の重さを量ろうとする。この時の問答では、

どのくらいの重さか
 三百斤の骨、四百斤の肉
 いやいや、四百斤の肉、三百斤の骨だろ、多すぎる

表わし、炬で鉄を熱し、風を送り炬の温度を上げ、鉄を打ち、焼き入れをし、鉄製品を作る工程を演じる。さらに鍛冶屋はシンバルの鉄帽をかぶる。連州路、行平路等祖先神が祭場に至る道を直すのに必要な鎌・斧・鋸を作製することを演じる。牛の角笛の牛角で牛を表わし、ト具で刀を表

等といい、周りは皆笑う。引き続き作製した刀・斧・鋸を使い木に見立てた杖を切る動作をするが、まず杖を倒しどこまで倒れて至るか確かめる動作を行なう。その後わざと弟子のいる方に杖の木を切り倒し弟子が転び笑いを誘う。倒れた木を製材し橋を作る様子を表現する。問答は、間違いをいい、それを訂正する言葉の掛け合いで笑いを誘う。

問答(2)は文献Z-15の「題目主家問答」と題された部分と文献Z-26の同様の内容の収められている部分を併用して行なわれている。初めは文献Z-15を使用する。七言上下句四句をひとまとまりとして問答形式を取り、反復が多用されている。

題目 主家問答
 伏 問 仔
 問郎行来做那事
 不 使 問
 蓮州半嶺日便夜
 伏 問 仔
 天光当当不早到
 傳 報 妹

問仔那州那県人／郎
 門前打鼓唱敬堂／行
 正是蓮州蓮大親
 問没可憐不可憐
 問仔為那路頭挨
 三便半夜正行来
 郎来因為路遙遠

蓮州半嶺日便夜
 伏 問 仔
 天光当当不早前
 傳 報 妹
 聽聞王主人還聖愿
 借 問 仔
 得知主人還聖愿
 早得三朝郎曉○
 小郎一心来○愿
 難 為 仔
 難為風流行夜路
 莫 怨 仔
 蓮州半嶺日便夜
 不 怨 仔
 難為風流行夜路
 傳 報 妹
 郎来因為路遙遠
 聽着路遠来接仔
 蓮州嶺上見誰怪
 蓮州半嶺見小怪

○郎連也到門前
 問仔那州那県人
 三更半夜到門前
 細句劉三說報娘
 郎来今夜○敬堂
 借問遠郷有意郎
 那人說報唱敬行
 主人有意仔有心
 莫怨小郎行路深
 難為貴仔到娘郷
 本當難怪路頭長
 不／莫怨小郎行路深
 問妹可憐不可憐
 不怨風流路来遠
 十分辛苦又可憐
 說報大王姉妹齊
 大家有意接郎来
 難為今夜到娘郷
 報郎有怪莫包藏
 得見山猪随路来

家主聲聲還良愿

金銀財白掃入街

伏 問 仔

借問行平連大郎

行平嶺上見誰怪

報郎千萬莫包藏

行平嶺上見着怪

得見山猪作笑行

家主聲聲還良愿

金銀財白掃入堂

伏 問 仔

問仔伏靈連大親

伏靈嶺上見誰怪

誰怪行來說報人

伏靈嶺上見小怪

得見烏龜攔路綿

家主聲聲還良愿

金銀財白掃入庁

伏 問 仔

問仔伏江連大双

伏江嶺上見誰怪

誰怪代來說報郎

伏江嶺上着見／下上怪

得見野狸飛過天

家主聲聲還良愿

五谷豊登千万年

一女問…お尋ねします。

どの州のどの県の方ですか？

何しにいらしたのですか？ 門前で鼓を打ち、歌堂を歌う

なんて。

一男答…お尋ねにならないでください。 連州から来たの

です。 連州から山を半分来たところで夜になりました。

あなたは私を気の毒だとは思いませんか？

二女問…お尋ねします。 どの道から来たのですか？ どうしてこんなに遅くなったのですか？

二男答…答えましょう。 遠いからです。 連州から山を

半分来たところで日が沈みました。 まだいい方です。 その

日のうちに着いたのですから。

三女問…お尋ねします。 どちらからいらしたのですか？

明るいうちに何で着かなかったのですか？ 何でこんなに

遅くなったのですか？

三男答…お答えします。 小さい声で劉三娘に答えます。

お聞きしたところご主人は還家愿をなさるそうで私は参加

しに、歌いに来ました。

四女問…お尋ねします。 遠くからいらした厚意の方で

しょう。 還家愿があると知っているようですが、誰が歌

堂があるといったのですか？

四男答…三日前にあることを知っていました。 主人は厚

意があり私も厚意があります。 真心を込めてこのためだ

けに参加したいと来ました。 自分のことを怒らないで遠く

て遅く着いたことを。

五女問…疑っていました。 理由もなくあなたを責めてつら

い思いをさせてしまいました。 あなたが私のところに来

てくれ申し訳ありません。ハンサムボーイに夜道を来てもらつてもともと遠かつたのが分かりました。

五男答…自分を恨まないでください。道が遠かつたのだ

から。連州から山を半分来たところで夜になりました。あ

なたは私を気の毒だと思いませんか。

六女問…恨みはしません。ハンサムボーイさん遠路はるばる来てくれて怒らないわ。疑つていただけだご苦労さま。

六男答…先に着いている三人の女性は大王の娘です。盤王のために来たのです。遠くから来て皆集まつていて女性たちは歓迎して待つていました。

七女問…遠くからいらしたのに、あなたを責めてつらい思いをさせてしまいました。連州の山を越える時奇怪なものを見ませんでしたか？ もし怪しいものに会つたら、隠さないでください。

七男答…連州の山で小怪を見ました。猪がついて来ました。家で還良愿を盛大にやつています。金銀財帛がくつついて来て 家に入つて来ました。

八女問…お尋ねします。行平太郎にお尋ねします。行平の山を越える時 何か奇怪なものを見ませんでしたか？

隠し事をしないでください。

八男答…行平の山を越える時怪を見ました。猪が笑つたのを見ました。家で還良愿を盛大にやつています。金

銀財帛がくつついて来て家に入つて来ました。

九女問…お尋ねします。伏霊太郎にお尋ねします。伏

霊の山で怪を見ませんでしたか？ どうぞどんな怪に会つたか、ちゃんと話してください。

九男答…伏霊の山で小怪を見ました。亀が道をふさぎ寝ていました。家で還良愿を盛大にやつています。金銀財帛がくつついて家に入つて来ました。

一〇女問…お尋ねします。伏江のお二人にお尋ねしま

す。伏江の山で怪を見ませんでしたか？ どうぞどんな怪にあつたか、ちゃんと話してください。

一〇男答…伏江の山で怪を見ました。狸が飛んで天を横切つたのを見ました。家で還良愿を盛大にやつています。五穀豊穡が末永く続くように。

以下は文献Z-26を使用する。

正是連州聰明仔 歌曲聲聲到仔邊

千般百様都報盡

無人生命仔聰明

郎来門前站一夜

一得主人門搦開

難為主人来接仔

相賀家主百様齊

難為為仔

難為貴仔好心機

一心開了把郎入

接郎入屋讓神思

湖南大門雙搦開

得見大王百様在高台

紅羅沙帕都掛盡

大王姐妹都来齊

左手執郎長沙鼓

右手接郎好貴鈴

連州貴郎行到外門外

少郎雙手接入庁

多謝郎情天様大

多謝郎情糖樣甜

主人開門把郎入

正是有心有意人

左手接郎橫笛吹

右手接郎好貴籬

伏靈／江貴人行／到外門外

小郎雙手接入堂

難為為仔

難為貴仔好心機

家主聲聲還良愿

大家有意讓神思

門前石壁能花開

主人有事請神来

主人有事請神到

郎来今夜唱歌堂／詞

一一女問…頭のよい連州の人たち。歌いながらやって来ました。種々な怪についてみんな話してくれました。とても頭のよい人たち。

一男答…門の前に一晩立っています。ずっと門を開けてくれませんでした。お手数をお掛けしますが、迎えてください。ご主人を言祝ぎにすべてそりました。

一 二女問…お手数をお掛けします。あなたは心掛けがよく、ありがたいです。誠心誠意門を開けてお入りいただきます。あなたをいれ、一緒に神に感謝します。

一 二男答…湖南大門が開かれます。大王を祀る儀礼の場ができています。紅羅帳も貼られ、大王の娘も集まっています。

一 三女問…女性の左手で男性の鼓を招き、女性の右手で男性の鈴を招きます。連州から貴人がやって来ました。

若い男性の両手をもって大庁に招きます。

女…感謝します男性の情は天のように大きい。感謝します男性の情は沙糖のように甘い。門を開け男性を入れます。本心が厚情の人です。

女…左手で男性のもつて来た笛を受け取り、右手で男性のもつて来たドラを受け取ります。伏靈、伏江からやって来た貴人は門の外に到着し両手を取って部屋に招きます。女…ありがたい。とてもよい心の方であります。家では還良愿を行ない、みんな誠をもって神に感謝します。



図4 戸口で来訪者の男性と主家の女性の問答が行われる

女・門前の石垣の花が開きうれしい。主人は心を込めて神を招きます。主人は真心をもつて神を招き、男性は今夜歌堂で歌います。

状況としては、主家で歌堂があると聞き、連州、行平、伏霊、伏江から歌を歌いに来訪した男性と主家の女性との問答である。この問答は本来男性と女性との間で行なわれたが、今は祭司たちが代わりをしている。

初め女性は来訪者をなかなか受け入れようとせず、すでに歌を歌う三人の娘は着いており、到着の遅れを責める。後に受け入れるが、道中怪しいものに出会わなかったか尋ね出会ったことが伝えられる。怪しいものは吉祥で福をもたらすと考えられており、男性は福を携え訪れたこと、家に福

がもたらされたことを言祝ぐ。さらに来訪者によってもたらされた楽器（長鼓・笛・ドラ・沙板）が受け取られ、訪れが歓迎される。

来訪者は焼畑による移住を繰り返してきたヤオ族⁷の移動地点の連州、行平、伏霊、伏江からやってきたとされる。この移動地はそこで活躍したと思われる祖先とも結び付けられて記憶される地であり、ヤオ族の民族の歴史にかかわる地である。祖先神のいるとされる地からの来訪者だからこそ最終的には福をもたらす存在として受け入れられるのだが、その正体を確かめるための問答が繰り返し広げられている。

この歌問答の後、口語でも、「怪を見たか?」「見た」というやり取りが行なわれ、周囲から笑いが生まれる。

問答(3)は長鼓舞を主厨官が舞うにあたり、玉簡を弟子が背から後ろに落とし鼓を作る「做鼓」を表現し、主厨官が笹で玉簡の上下を巻き鼓を用意する「置鼓」を表わし、さらに玉簡をもちしやがみ鼓の出来を試す「試鼓」を表わし、その後木を切り長鼓を作製する内容の問答(3)、

どこへ行った?
山へ
何をしに?
木を切ってきた

何にする？

長鼓を作る

を行ない。さらに祭司は『善果書〇乙本』（文献Z-16）の「唱鼓木出世歌」にある梓木で美しいよい音の鼓が作られ歌堂で打ち鳴らされる内容を誦し、鼓の音を聞く「聴鼓」を表わす。その後主厨司によって長鼓の舞が舞われるが、厨官の長鼓の舞は本来、飄洋過海の様子、還盤王愿の儀礼、餅つき、叩首、楽神、家作り、農耕（焼畑）、度戒儀礼の磨刀の場面等を表現する七二の動作からなる。二人で演ずるのがよいとされる。実際に舞われたのは、測量、地を掘る、木を植える、木を切る、木を立てる杵を作る、地を掃く、鋸で板にする内容であった。長鼓の舞を行なうにあたり長鼓の作製から始め、長鼓の舞ではヤオ族の歴史や生活や祭祀という重要な内容が身体によって表現される。

さらに祭司は『善果書〇乙本』（文献Z-16）の「出門外園堂」を誦し、歌堂の場で大歌を歌う「唱歌堂」を表わす。

問答（4）は『大歌書一本上冊』（文献Z-19）が盤王大歌声音のフシ回しでツアンガー（現地語）される。三六段あるとされる目次は、



図5 主厨官の長鼓の舞

起声唱、初入席歌詞、隔席唱、論娘唱、日出早、日出晏、月正中、日正斜、月落江、月落西、月落流、夜黄昏、夜深闇、夜深深、天星上、天上星、月亮亮、第一洪水沙曲、天大旱、天柱倒、洪水発、洪水浸、北辺暗、天暗鳥、葫芦叫、葫芦熟、見大怪、伏羲相合、為婚了、第二三峯閑曲、造天地、置天地、唐王出世、平

王出世、信王出世、第三満段曲、大盤州、小盤州、第四荷葉盆曲、桃源洞、閩山学堂、造寺魯班、花巧、橙古何物、第五南花子曲、彭祖、郎老、第六飛江南、不倒地、船到水、神去也、第七梅花大盃有頭無尾歌詞

と記されている。その大歌の一段一段の冒頭部分は問答形式で誦読される。

『大歌書一本上冊』（文献Z-19）の部分为例にすると、

と一人が歌うと、もう一人は本文に従い、

唵得唵来唵也行
 唵聽後
 唵得唵来唵也来
 唵上唵頭唵後
 唵上唵頭唵後行
 唵堂到
 唵 (意味は何、読みはニヤン) 話唵村唵堂到
 唵上唵頭何後來
 唵堂到

人話郎村歌堂到

踏上船頭聽後來

歌堂到

踏上船頭聽後行

郎小聽聲又聽後

聽得娘来郎也来

又聽後

(人の話では男の村で歌の祭りがあ
るそうだ)

(船の舳先に登り、聞いてから来る)

(歌の祭りがある)

(船の舳先に登り、聞いてから行く)

(彼は音を聞いて聞いてから)

(聞けば彼女が来れば彼も来る)

(聞いたら)

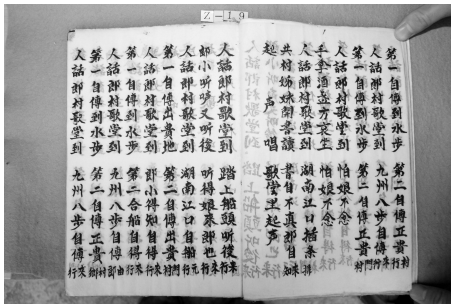


図6 文献Z—19 問答(4)の事例の原文
該当頁

と答える。
一人が七言上下句四句を、一句の一言、三言、五言、二句の
一言、三言、五言、三句の一言、三言、五言、四句の一言、三
言、五言を唵(ニヤン、何の意味)に置き換え歌うと、二人目
が唵部分に回答を入れ歌う。この時文面通りではなく、一句七
言、二句七言、一句七言の末三言を繰り返して、二句七言、三句

聽得娘来郎也行

(聞けば彼女が来れば彼も来る)

七言、四句七言、三句
 七言の末三言を繰り返して返
 し、四句七言を歌う。
 詞章は七言上下句が対
 となり四句でひとまと
 まりを構成し、実際の
 歌唱は、反復が繰り返
 される。謎掛けと謎解
 きの問答が歌唱され
 る。詞章は四句を一組
 とするが、最初の段は
 一句目の「人話郎村歌

堂到」を必ず一句目に据え反復させて進められる。

『大歌書』には七言上下句で構成される大歌の詞章だけでなく間にレイチャー（現地語）のフシ回しで歌われるとされる「曲」（七韻曲）がはさまれる部分があるが、その後にく七言上下句の大歌の詞章も冒頭の類頁は問答形式で歌われる。

問答（5）は「曲」が歌われる時には、その前にまず主厨官が線香をともし、祭司が沙板を鳴らし、

問 青天白日 答 白日青天

問 各歌乱唱 答 乱唱乱排

（それぞれ歌う）
（めちやくちやに歌う）

問 乱排乱唱 答 唱歌唱歌（歌と曲を歌う）

問 唱歌唱歌 答 唱到第一洪水沙

（第一洪水沙に歌い至る）

問 伸過第一洪水沙 答 唱得句句也是歌

（第一洪水沙に至る）
（歌っている一句一句は歌）

問 唱得句句也是曲 答 唱得有頭有尾之歌

（歌っている一句一句は曲）
（始めと終わりのある歌を歌う）

問 不得唱得無頭無尾之歌

（始めと終わりのない歌は歌わない）……………

の掛け合いが行なわれる。前者の下句を受け後者が反復させ、次々と繋いでいく。その後「曲」の調子を合わせるための「拉里連郎里拉利 連郎拉里利拉里 里呀連郎利 連郎拉里利拉利…」は調子のずれを修正するために「曲」の間にも入れられる。「拉里連郎里拉利…」は言語的な意味は不明であるので、呪術的な詞章であると考えていたが「廣田 二〇一—d」、

「曲」の調子が表わされており、「曲」ごとに異なる調子を取る

ので、その「曲」の調子を思い返すための実質的な役を果たしているといえる。

問答（6）は『大歌書 一本下冊』（文献Z—20）に進むにあたり、歌書を管理している劉三妹娘の書棚から、下冊を取り出して歌の場に戻ってくる様子を問答形式で表現する。

問 何楽嶺 何樂生子何樂源何樂山

人話石榴何生子何樂生子出何源出何山

答 石榴嶺 石榴生子石榴源石榴山

人話石榴要生子 石榴生子出深源

要生子 石榴生子出深山

源山部分を旗／埂、排／崩、河／洞、灘／埧、沟／田、京／州、郷／村、街／院、楼／門、庁／房、京／棹、廂／書の順に置き換え、さらに廂書から源山へとさかのぼって置き換え、歌の場に歌書を導くための道筋が示されており、この問答を行うことで下冊が歌の場に取り出されるとされる。問いの「何」の部分に回答を入れて答える形式となっており、解説は難しいが「どこ」の山に、何の木の実、どここの源／どここの山、人は石榴が何の実をつけ、どここの源／どここの山に生えるか？」「石榴の山に、石榴の実、石榴の源／石榴の山、人は石榴が実をつけ、石榴の実は源／山にあるという」と読むことができ、謎を掛けて謎を解く問答であることは明確である。現実には存在する歌書はあたかも歌の魂を劉三妹娘からいただいでこないと真実の歌詞や歌唱にならないと考えられているかのようであり、歌書が祭場に至る道順が謎掛けで説かれているのである。

問答（7）は、大歌の「又何物段」部分で、問答形式で構成され、冒頭部分を例にすると経文の文面の七言上下四句は、

何物変 变成何様得娘連（何に変われば、何に変われば彼

女に繋がることか）

得郎变成銀梳子

上娘頭上作横眠（彼が銀の櫛に変われば彼女の頭の上で横になって眠ることができる）

とあるが、実際には、

問 何物変 变成何様得娘連（何に変われば、何に変われば彼女に繋がることか）

得郎变成何様子 上娘頭上作横眠（彼が何に変われば彼女の頭の上で横になって眠ることができるだろうか）

何様子上娘頭上作横眠（どうすれば彼女の頭の上で横になって眠ることができるだろうか）

答 容易变 变成一様得娘愛（変われる 一度変われば彼女のハートをつかめる）

变成二様得娘連（二度変われば彼女に繋がることか）

容易变 变成二様得娘連（変われる 二度変われば彼女に繋がることか）

得郎变成銀梳子（彼が銀の櫛に変われば）
上娘頭上作横眠（彼女の頭の上で横になって眠ること

ができる)

銀梳子 上娘頭上作横眠(銀の櫛なら彼女の頭の上で横になって眠ることができる)

と歌唱される。女性の頭から足元まで身に着けるものに男性が変身する内容が続くが、本文の七言上下句四句のうち三句目と四句目が何に変身するか、変身するとどのようかという答えになっており、それを引き出すために、一定の調子が繰り返される。「何に変わればよいのかな、何に変われば○○になるかな?」「簡単簡単何に変わればよいかって、○○に変われば○○になる」のように謎掛け形式で次々と反復展開される。実際の歌唱法は極めて複雑であり、経文の文面を一見するだけでは、歌唱法まで理解することはできない。

問答(8)は、

酒は何人酒 棹は何人棹 何人声々還良愿 酒是大王酒
 棹是大王棹 家主声々還良愿 何人棹上得分明 大王悼得
 分明

酒は誰の酒 船の櫂は誰の櫂 誰が還家愿を行なうのか
 (酒は大王の酒 櫂は大王の櫂 施主が還家愿を行なう)

誰が船のこぎ方を分かっているのか 大王が船のこぎ方を分かっている)

片付けることを盤王に知らせる内容で、帰りの船も作り、供物も載せ、神を送る支度をする中、あえて問い掛けで、謎掛け謎解きの形式を取り、祭祀の終わりを予告しお帰りにたくように促している。

その他の問答としては、直接的な歌問答でなくても、歌の進められる前後には対をなす内容の読誦が見いだせる。

大歌に入る直前に『大歌書一本上冊』(文獻Z-19)の最初にある「坐席三幡」が読誦される(二七、一九日二一時三〇分頃)が、その内容と下冊に入る直前に読誦される『大歌書一本上冊』(文獻Z-19)の最後に加えられた(二八、二〇日三時頃)「接鈴用」の内容を比べると、明らかに対をなしているといえる。「坐席三幡」では「大歌の作者である劉三妹娘の歌詞と受け劉三妹娘の歌声を受け取らないうちは、粗末な言葉で連州、行平、伏霊、伏江、五旗、家先の心にかなうものではない」としているが「接鈴用」では「劉三妹娘の歌詞と声を受け取って貴い言葉で神々の心になつたものである」としており、前を受けて後で展開されていることが分かる。

おわりに

「盤王愿」という大儀礼名が示すように、盤王の名に集約されてはいるものの、三廟聖王とも総称され、さらに連州唐王グループ、行平十二遊師グループ、福(伏)霊五婁グループ、福江盤王グループ、厨司五旗兵馬グループ、陽州宗祖家先グループとにグループ分けすることができる、ヤオ族の祖先神の神統に属する神々が祭祀の対象とされている。神々は連州、行平、福(伏)霊、福江、厨司、陽州の地名を付して称されるが、これはヤオ族が長年にわたって移住を繰り返してきた記憶の地とそこで活躍した祖先神とが接合して理解されていることを表わしている。

最初の段階で読誦された「点男点女過山根」の漂洋過海神話にあるように、かつてヤオ族が海を渡り遭難した際、三廟聖王に救いを求め願を掛け、無事に上陸できたので、約束を果たす祭祀を行なうようになった。神々との契約関係は現在に至り引き継がれ、救世主盤王に象徴される祖先神は、子孫の祈願の対象であり続け、大願成就の願ほどの祭祀が続けられてきたのである。〔廣田 二〇一三c〕

盤王愿儀礼は、広い意味での祖先への祭りである。神話叙事および歴史叙事である『大歌書』いわゆる「盤王大歌」を歌唱することで自民族の起源や出自にかかわる伝承を再確認し、祖先を讃え、綿々と継続されてきた祭祀契約とその履行の実践である祭祀が行なわれる。

祭祀においては、祭壇の供物にまで民族の漂洋過海神話が表

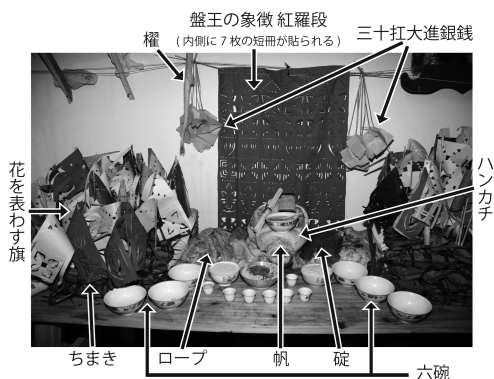


図7 盤王愿の祭壇 渡海神話の船を表わす豚の供儀

現され、豚の頭の上に載せられた肉片は、大時化の際船の舳先で無事を祈るのに使ったハンカチを表わす。さらにしつぽは船の櫂、腸は接岸のロープ、肝臓は船の碇、脂肪は帆布を表わす。豚の上に積み重ねられたちまきは帆を表わす葉でくるまれて

いるとされ、その上に挿された旗は救世主盤王の好きな三六種の花を表わすとされる〔廣田 二〇一三c〕。神話と歴史が歌われる儀礼空間は自民族のアイデンティティを五感で認識する場となる。

本事例では、歌は神の声がわたされ歌書や歌詞が引き出されて初めて歌唱されると考えられており、大歌の歌唱自体極めて神聖な行為だといえる。永池健二⁸⁾によれば、歌は目に見えない存在に働きかけを行ない、隠れている者を言葉によって顕在化するとするが、事例の中でも効果的に歌が用いられており、祖先の移住の記憶と祖先の歴史、神とされる祖先を顕在化しているといえる。さらに比嘉実⁹⁾が南島歌謡の研究において「言霊にすぎりながら、呪術的に自然に立ち向かい、克服しようとする祭式歌謡には、ひたすら呪術的心性にのみ頼るのではなく、歴史的に獲得された体験的な自然に対する認識が基層にあることを忘れてはならない」と述べているが、ヤオ族の大歌にも民族が蓄積してきた自然に対してのみならず種々な知識や精神文化が凝縮されており、歌唱では問答や反復の形式を取りつつ発露されるのである。折口信夫は『古事記』にある倭建命が東征の途中で火の番をする老翁と掛け合った歌を取り上げ、掛け歌が歌の起源であると説明している¹⁰⁾。さらに折口信夫は、片歌五七

七を原型に短歌の様式が発生すると考え「神様の詞を促し尋ねようとすると、どうしてもある定(キマ)つた神の語の様式を以てしなければならぬと信じてゐた」ところから発して、人間が神と応接する様式が五七七であったとされたというのである¹²⁾。金文京は従来の演劇史において取り上げてこられなかった祭祀性を強くもつ文芸の詩讀系文学・詩讀系演劇に光をあて論じている¹³⁾。金文京によれば詩讀系文学は主に七言詩を基本とするが、この起源は巫歌等民間宗教にあり、それ故、知識人からは五言詩に比べ軽視されたとする。

祭祀性の強いとされる七言からなる詞章は、祭祀の場において歌唱という形態をとって表出されることで、より一層呪力が発揮されると考えられていと推測する〔廣田 二〇〇九〕。神の声によって、七言の調子でヤオ族の重要な民族知識が伝えられることに意義があるといえる。大歌の歌唱は多くの場面で問答形式を取り、謎掛けと謎解きが行なわれ、祖先の移住が記憶されている地から来た来訪者との遭遇が表現される。謎掛けと謎解きは極めて重要な意味をもつが、民族の知識を引き出し、民族の歴史を学習する仕掛けともなっている。さらに謎掛けにより知りたい欲求も増長され修辭的反復繰り返しにより民族知識の定着に繋がることになる。もともと対句と反復は儀礼に

において重要な意味をもつとされるが、本稿の事例においても複数の修辭の反復が確認でき、大歌における反復は祭祀歌謡の特性といえる。

注
(1) 星野紘

「中国トン族と日本の掛け合い歌など―多声合唱の由来―」『民俗音楽研究』三四 日本民俗音楽学会 二〇〇九年 頁 一三―二四頁

星野紘

「歌垣の始まりの問題―不可視な存在との問答―」『奄美沖縄民間文芸学』一〇 奄美沖縄民間文芸学会 二〇一一年 四九―五九頁

星野紘

『歌垣と反閉の民族誌―中国に古代の歌舞を訪ねて―』創樹社 一九九六年

星野紘

「中国少数民族の掛け合い歌」『歌・踊り・祈りのアジア』勉誠出版 二〇〇〇年 二九二―三〇五頁

星野紘

『ヤマト少数民族文化論』大修館書店 一九九九年

星野紘

「歌垣と神話をさかのぼる―少数民族文化としての日本古代文学―」新典社 一九九九年

星野紘

工藤隆志『中国少数民族歌垣調査記録一九九八』大修館書店 二〇〇〇年

星野紘

工藤隆志『日本 神話と歌の国家』勉誠出版 二〇〇三年

星野紘

工藤隆志『歌垣と身体』『大航海』五三 新書館 二〇〇四年 一五六―一六六頁

星野紘

工藤隆志『雲南省ペー族歌垣と日本古代文学』勉誠出版 二〇〇六年

星野紘

岡部隆志『古代文学の表象と論理』武蔵野書院 二〇〇三年

岡部隆志

『万葉集講義 なぜ歌うのか』共立女子短期大学文科日本語・日本文学研究室 二〇〇六年

岡部隆志

「歌垣をめぐる―高岡市万葉歴史館編集『恋の万葉集』笠間書院 二〇〇八年 二八七―三一四頁

岡部隆志

「問答論―彝族の神話『梅葛』と折口信夫の問答論―」『共立女子短期大学文科紀要』五五 共立女子短期大学文科 二〇一二年 一―一五頁

辰巳正明

「万葉集と比較詩学」おうふう 一九九七年

辰巳正明

『詩の起源―東アジア文化圏の恋愛詩―』笠間書院 二〇〇一年

辰巳正明

『詩霊論―人はなぜ歌に感動するのか―』笠間書院 二〇〇四年

辰巳正明

「中国文学の視点から万葉集における叙事大歌の形成―中国西南少数民族の大歌との関係から―」『万葉古代学研究所年報』第三号 二〇〇五年 二二六―二二六頁

辰巳正明

「折口信夫―東アジア文化と日本学の成立―」笠間書院 二〇〇七年

手塚恵子

「歌垣 恋歌の奇祭を訪ねて」新典社新書 二〇〇九年

手塚恵子

『万葉集の歴史 日本人が歌によって築いた原初のヒストリー』笠間書院 二〇一一年

手塚恵子

「歌掛けの起源説話とその風土―中華人民共和国、壮族の事例から―」日本歌謡学会編『日本歌謡研究―現在と展望―』日本歌謡学会 一九九四年 五四―五二頁

手塚恵子

「中国広西壮族自治区歌垣調査記録」大修館書店 二〇〇二年

手塚恵子

遠藤耕太郎「歌掛け歌における五七音への指向性―中国西南少数民族歌謡の音数律―」『アジア民族文化研究』七 アジア民族文化学会 二〇〇八年 一八九―二〇二頁

- 遠藤耕太郎 『モノ人母系社会の歌世界調査記録』大修館書店 二〇〇三年
- 遠藤耕太郎 『古代の歌—アジア歌文化と日本古代文学—』瑞木書房 二〇〇九年
- 遠藤耕太郎 『歌の呪力と歌掛けの技—歌垣・問答・贈答—』『古代文学』四二 古代文学会 二〇〇三年 七七〜八八頁
- 岡部隆志・工藤隆・西條勉 『七五調のアジア—音数律からみる日本短歌とアジアの歌—』大修館書店 二〇一一年
- 岡部隆志・手塚恵子・真下厚 『歌の起源を探る歌垣』三弥井書店 二〇一一年
- 梶丸岳 『山歌の民族誌—歌で詞藻を交わす—』京都大学学術出版会 二〇一三年
- 梶丸岳 『「うまいこと言う」のための語用論—中国西南部における掛け合いの歌の認知詩学的考察—』『言語科学論集』一四 京都大学大学院人間・環境学研究科言語科学講座 二〇〇八年 八九〜一〇七頁
- 梶丸岳 『歌掛けを見る／聞く—前観光的芸能としての中国貴州省山歌—』『人文学報』九九 京都大学人文科学研究所 二〇一〇年 六一〜七七頁
- 梶丸岳 『中国貴州省羅甸県アプイ族の「年歌」—アプイ語による長詩系歌掛け—』『アジア民族文化研究』一〇 アジア民族文化学会 二〇一〇年 一〜四〇頁
- 伊藤悟 『徳宏タイ族社会の「うた」の職能者—文脈の変化に関する考察—』『総研大文科学研究』八 総合研究大学院大学文化科学研究科 二〇一二年 九九〜一二五頁
- 中国国内の研究状況としては、中国国内で歌謡研究が盛んであった一九八〇年代少数民族の多く居住する地域を中心に歌謡の収集が進められ『民間文学』『三月三』『山花』『楚風』等の雑誌に発表された

り、本にまとめられたりした。貴州省民間文学組整理、田兵編選『苗族古歌』貴州人民出版社 一九七九年は、初めて苗族の創世神話がまとまった形で紹介された書である。続いて一九八〇年代中国民間文学研究会貴州分会編で『民間文学資料』と題して貴州省の各少数民族の歌謡が収集され百冊以上刊行されている。貴州省民族研究所編で貴州省少数民族の歴史、文化、政治、経済の分野について民族研究参考資料がまとめられ、第二三集には苗族の『開親歌』（一九八五年）が入れられており、民族の起源、歴史、婚姻に関する叙事歌が収められている。貴州省社会科学院文学研究所および黔南布依族苗族自治州文学研究室編で布依族民間文学叢書がまとめられ、『布依族古歌叙事歌選』（一九八二年 貴州人民出版社）には民族の起源や歴史の叙事歌が収められている。その他の少数民族が集居する地域の雲南省からは、雲南省民間文学集成編輯辦公室の編集による『雲南依族歌謡集成』（一九八五年 雲南民族出版社）にも創世歌等が収められているが、口絵に祭祀の場面が収められている。雲南少数民族文学叢書編輯委員会編の雲南少数民族文学叢書『傣族古歌謡』（一九八一年 中国民間文学出版社雲南）創世歌等が収められている。この時点では、儀礼との接合はなく歌の収集が終わっている。近年道教や民間の法教の儀礼とそこで使用される経典を接合させた研究報告が、王秋桂を主編として『中国伝統科儀本彙編』（新文豊出版公司）と題する叢書として出版が継続されているが、歌謡に焦点をあてた研究とはいえない。祭司に施主が儀礼の依頼をする際わたす包み。中に塩が入れられており、表面に盤王と記されている。

(2) 盤王憑儀礼において招聘される神々は、『神名書』（文獻C-3）にあるように、いくつものグループに分けることができる（松本 二〇〇一）。連州唐王グループは、龍王、晋教四王、起刀五王、托天六王、置山七王、盖天八王、南楼九王、楼上相公、地下羅任秀才、門前進壇十丈、竜古聖人、竜依竜十七官、貴依唐十八官、長衫長聖九娘、長衫

長聖十娘、里頭便請唐十五娘、花窮便請唐衫十娘、里頭出門托帶小
王、小玉出門托化前占夫人、後古夫母、連山蓋山童子、青衣女人で、
連山大廟に属するとされる。

行平十二遊師グループは、大堂高〇六位師主、大堂高〇六位師傳、
藤家師、坭家師、落家滅家師、色家師、奉家師、泰家師、李師、兪家
師、楼泥三唱、楼坭四唱、十二歩刀梯、十二面蔭床含梨、潑沙漠病使
者、退病使者、師公、師男、師孫、師公、師色で、行平大廟に属すと
される。(〇は不明。以降同じ)

福(伏)靈五婁グループは、伏靈聖公母、左〇母手、過雲右手過雲
順手、過雲太白聖人、置鼓一郎、置鼓二郎、横吹竹黄三郎、拍板四
郎、長沙木鼓五郎、歌頭六郎、歌尾七郎、王上楼桃花妹妹、下楼流羅
仙娘、前門強瑟、後門立椅、後生年少唱歌、有段劉三妹妹で、伏靈大
廟に属すとされる。

福江盤王グループは、盤古郎老聖人、金童、玉女、黄趙二位、〇未
花姉妹、五谷仙娘、李家李請書丁、劉一劉二仙童、把瓶猷瓶郎官、許
愿童子、把愿判官で、福江大廟に属すとされる。

厨司五旗兵馬グループは、東門五旗、南門五旗、西門五旗、北門五
旗、中門五旗、撐船過海踏馬、過街、寄書、寄文、寄語五旗、
真珠小筆、磨墨二郎、把瓶童子、猷郎官五旗で、厨司大廟に属すとさ
れる。

陽州衆位宗祖家先は、家先単に記載されている直接の先祖を示す。

道教の神々ではなくヤオ族の祖先神の名が連ねられている。

(4) 流楽の最初にヤオ族のアイデンティティーの根幹をなす、移住と海を
渡り遭難した際の盤王への救済の願掛けと無事に難を乗り越えた後の
盤王への願ほどの祭の實行、その後の移動と祭祀の継承が明らか
にされる「点男点女過山根」が読誦される。内容は、

「点男点女過山根」

船先にあり船尾にひざますきとんどん進む。
連州唐王聖帝、行平十二遊師、福(伏)靈五婁聖帝、福江盤王聖
帝、厨司五旗兵馬、陽州宗祖家先集まってくたさい。大神父母た
ち集まってくたさい。

きびすを返し、広々とした聖席にお着きください。それぞれ傍ら
の言を聞き、耳を傾け、私の言を聞いてください。一人の大廟の
靈師は、奏上します。瑤人の子孫の某音の者が還家を行ないま
す。始まり由来を述べれば、盤古が天地を創造し、高王が天を造
り、平王が地を造り、太陽と月を造り、太陽は第一の宝、また七
星を造り、第二の宝とし、また果てしなく広い地方(田)を造り
くねくね曲がる川を造る。

そのようだったが、景定元年四月八日のよい日に洪水が起り、
とんどん水があふれ、上は三十三天、下は十八地下まで水があふ
れ、天下に誰もいなくなり、ただ伏羲と姉妹のみとなった。天下
を手をかざしてみると、手をかざして上は三十三天、下は十八閭
羅大王地下を見るが、まったく誰もおらず、仙人が一丈二尺の鉄
の棒を手に行くも、天下にまったく子孫がいなくなり、伏羲と
姉妹のみとなり夫婦となるしか方法がなくなつた。兩岸で髪をす
けば髪が絡み合い、兩岸の竹は互いに繋がりがあひ、兩岸で焼香を
すれば煙がまとわりあう。それでも姉妹は夫婦となるのを拒ん
だ。まさに進んで行くと、亀に出会う、亀は夫婦となるように勧
めるが、姉妹はきびすを返して亀を打ち割ってしまう。それでも
亀は円満に夫婦となる。

天下に人なく夫婦となる。楊梅の木の下夫婦となった。七日七晩
身ごもって血の塊を産むが人ではなく、九州の聖人である養女が
刀で塊を一二〇の姓の人に分け、九州六国に住まわせる。一二姓
の瑤人も分けられ、南京十保山に落ちつく。久しく年を経て住む
が、地が壊れた。

寅卯二年に天地は日照りとなり、一人の老女が川べりで魚釣りをし、たばこを吸った。その時、たばこの火を落としてしまい、人々の黄杉の木を焼いてしまった。もう住むことができず、どうにもならず瑤人の子孫は一二姓それぞれ一二艘の船を用意し、大海を渡った。

途中三更の頃、夜も静けき戌亥の頃、風が吹き出し、波が高くなり、船は波に翻弄されぐるぐると回った。兄は妹の刺繍のハンカチを手にし、船頭に船尾にひざまずき大願「流羅歌堂酬神酬意保書」を掛けた。すべての大壇のもろもろの神々、三廟聖王、有道有法の大神父母の神々に人々の命を救い順風を進めるように願掛けをした。すると船頭も船尾も安定し、順風となり、無事南海の岸に上陸できた。丁卯の年、八月一三の良日に願ほごきを行ない「歌堂良愿保書」の祭祀を行ない大神父母の神々に念誦した。

その後代々続き、竹の根と竹の子のように継承された。それぞれ分かれ雷古山や伏子連州に定住した。久しく年を経て土地が荒れ、それぞれ移り住み、湖南道州や黄土塘に至り、さらに久しく年を経て、長い時間を経て土地が荒れ、また移り住み寧遠や西洞北路や黄塘宝塞山に至り定住した。さらに久しく年を経て、さらに土地が荒れ、移り住み桂陽州や滴水山に至り定住した。さらに久しく年を経て、三〇年四〇年と年が経ち土地が荒れてさらに寧遠や九疑に移り定住した。現在某音の某子孫は某所に至り、前に虎後ろに山の地脈に住まいし、泥で家を建て衆神祖先を祀る祭壇を設けた。三廟聖王を敬い祀り、掛灯を行ない代々継承し、以前某月某日に願掛けを行なう「歌堂良愿保書」を行ない、今願ほごきを行ない、三姓単郎と三姓青衣女人によって師に依頼し、祭壇を設け「還歌堂良愿保書」を行なう。一人の大廟靈師は鈴を振り、神々を招き「大聴意者書」を述べる。三姓単郎と三姓青衣女人は

男が女の前に立ち、古代の礼によって、もともとそうであったように心に不都合なことがあり、神に対して犯をおかした場合、入席三拝し、出席三拝し、回席二拝し、今某音の子孫が願ほごきを行なう。心に不都合がなく犯をおかしていないならば入席二拝出席二拝。回席二拝し大神父母神に念誦する。祭壇で我らの礼拝に接し壇上で礼拝を受け、ゆつくりと聖席に座し、男が「拝神聖」を歌い「引歌出歌」を歌うのを受けてください。

(5) 最初にヤオ族が盤王愿儀礼を行なうことになった原点に立ち返り、願掛けと願ほごきの祭祀の原義を確認するとその履行を再現する儀礼を行なうことを表明しているといえる〔廣田 二〇一三〕。

(6) 文献番号は神奈川大学プロジェクト研究所ヤオ族文化研究所の閲覧収集資料番号を示す。文献の多くは題名が記されていないからである。「大歌書」いわゆる『盤王大歌』には創世神話等の神話叙事、民族の歴史叙事、祖先にまつわる種々な伝承等が含まれている。広西・湖南の過山瑤が行なう、還盤王愿で歌われる『盤王大歌』は七言を主として三六段または三二段、または二四段または一八段から構成され、さらに七任曲と称される曲調を異にする七つの歌を加えて成立するとされる。

湖南省藍山県滙源郷湘藍村馮家で実施された還歌堂愿儀礼で実施された時使用された『盤王大歌』（文獻B・3）は、起声唱・齊入席・隔席唱・論娘唱・日頭出・日正中・日落江・日落西・日落鳥・日頭過江・夜深深・夜黄昏・天上星・月亮亮および第一紅紗曲、次に天大早・見怪歌・天暗鳥・北邊暗・洪水発・雷落地・葫蘆・伏羲・洪水盡・為婚了および第二山逢閉曲、次に造得地・置天地・唱王打水・深山竹木・唐王出世・信王出世・玉女梳頭・白涼扇・坦傘・盤王出世・石崇・富貴・琵琶頭・紗板・班碧および第三滿段曲、次に襟上伏門・

大婆女・説婚早・劉山・秀才・師人・十二遊師・鳥雲生・五婆見・英台・山伯・生時・大州大・大州・老鼠・大缸・石榴生および第四葉荷葉で成立している。「廣田 二〇一 a・三六九頁、二〇一三 f」

湖南省江華瑶族自治县で収集された乾隆年間の手抄本を整理した『盤王大歌』（中国少数民族古籍瑶族古籍之一 湖南少数民族古籍办公室主編 岳麓書社 一九八七年）は内容が充実していると考えられるが、起声唱・日出早・日正中・日斜斜・種竹木・唐王出世・盤王出世・盤王献計・流羅子・琵琶頭・石崇富貴・歌一段・魯班造寺・梅花曲・雷落地・郎老了・彭祖歌・夜深深・大小星・月亮亮・黄条沙・天大早・天地動・天地暗・北邊暗・見大怪・相逢賢曲・造天地・万段曲・送神去・亚六曲・荷葉杯曲・桃源洞歌・四字歌・放猎狗・夜黄昏・何物歌・盤州歌・南花子曲・閩山歌・梁山伯・鄧古歌・飛江南曲から構成されている。

広西チワン族自治区の賀県で収集された『盤王大歌』（中国少数民族音楽古籍叢書之一 盤承乾等収集整理 天津古籍出版社 一九九三年）は、起声唱・輪娘唱・日出早・日正中・日斜斜・日落江・黄昏歌・夜深深・大星上・月亮亮・黄沙曲・天大早・見大怪・北邊暗・雷落地・胡蘆曉・洪水尽・為婚了・三逢延曲・造天地・種竹木・三更深曲・盤王出世・盤王起計・富貴竜・荷葉杯曲・梁山伯歌・南花曲・桃源洞・閩山学堂歌・造寺歌・飛江南曲・何物歌・彭祖歌・梅花曲・亚六曲で構成されている。

一九六〇年代に広西チワン族自治区大瑤山瑶族自治县三角公社で収集された『盤王大歌』（広西民族学院中文系民族民間文学教学研究翻印 一九八〇年）は、起声唱・初入席・隔席唱・論娘唱・日出早・日正中・日斜斜・日落紅・日落西・夜黄昏・夜深深・天上星・月亮亮・天大早・見大怪・天地動・天暗烏・北邊暗・雷落地・伏羲姊妹・胡蘆・洪水完・洪水天・造天地・鳥雲生・大盤計・小盤計・桃源・閩山学堂・魯班造寺・何物・鄧古・彭祖・郎老了・放猎狗・歌船・第一黄条

沙・第二梅花・第三峯寒・第三晚段曲・第四荷葉盃・第五南花子・第六飛江南・第七梅花で構成されている。

張勁松によれば本事例と同県である藍山県桐村の『盤王大歌』は、第一章は日出早・日正中・日斜斜・日落西・日落崗・夜黄昏・夜深深・天上・大星上・月亮亮のほか、第一曲黄条沙を加えて構成され、第二章は、天大早・見大怪・天地動・天柱倒・天暗烏・北邊暗・雷落地・洪水完・洪水尽・怕不合・為婚了のほか、第二曲三逢閑を加えて構成され、第三章は、造得天・造得地・造得火・置山源・置青山・相説報・唐王出世・盤王起計・邀娘売・白涼扇・富貴竜・琵琶竜・唵羅真のほか、第三曲万段曲を加えて構成され、第四章は、賜嫁早・劉哈大・鳥雲生・梁山伯・大州大のほか、第四曲荷葉杯を加えて構成され、第五章は、桃源峒・閩山鳥・閩山青・入連洞・会造寺天字大・鄧鼓歌のほか、第五曲南花子を加えて構成され、第六章は、何物変・得郎变・何物輪・何物爛・何物死・彭祖生・彭祖死・郎老了のほか、第六曲飛江南を加えて構成され、第七章は、木倒地・船成了・船到水・送路去・帰去也・飲酒了のほか、第七曲梅花相送を加えて構成されるとしている。（張勁松『藍山県瑶族伝統文化田野調査』岳麓書社 二〇〇二年 六三～六五頁）

資興市の宗教職能者所有の乾隆四十二年の銘がある手抄本の『大天歌書』には、起掣唱・論娘唱・○入席・隔席唱・分○唱・平平唱・日頭出・月正中・月斜斜・月落西・月落江・日頭過江・夜深蘭・夜深深・夜黄昏・黄昏・月亮・第一紅系紗曲・一片烏・二十八後・第二園歌曲・天太早・見怪歌・見怪路・見大怪・天柱倒・天暗烏・北邊暗・洪水完・雷落地・胡蘆歌・大州出・胡蘆熟・洪水完・洪水浸・為婚了・第二（ママ）園三逢閑曲・造得地・造得天・置天地・盤王歌曲・深山竹木・唐王出世・信王出世・盤王出世・白涼扇・坦傘・魯王歌曲・盤王起計・石崇富貴・琵琶・魯班・唵囉・第三園滿段曲・出嫁早・秀才・師人・十二遊師・鳥雲上・大州・英台・梁山・大缸・第四段荷葉

歌曲・桃源・閩山・起造歌曲・造寺魯班・鄧古歌・遭小何物歌・第五段南花曲・唱何物歌・唱古人歌・郎老了・唱彭祖歌・唱第六段飛江南曲・唱送聖歌・缸成了・缸到水・送神去・第七段鴨六曲が並べられている。

その他の地域の『盤王大歌』は、湖南省江華瑶族自治県のテキストとして、鄭徳宏選編『瑶族経書』岳麓書社、二〇〇〇年、広東省の乳源瑶族自治県のテキストとして盤才万、房先清収集・李黙編注『乳源瑶族古籍匯編』上・下、広東人民出版社、一九九七年、広西チワン族の例が農学冠・李肇隆編著『桂北瑶歌的文化阐释』民俗出版社出版発行、二〇〇八年にも収められている。

さらに中国以外の諸機関に所蔵されている『盤王大歌』については、バイエルン州立図書館はヤオ族写本を二七七六件所有し、うち八六七件が目録化されている。(Höhlmann, T. O. Hrsg. 2004. Handschriften der Yao Teil I Bestände der Bayerischer Staatsbibliothek München Cod. Sin.147 bis Cod.Sin.1045. Stuttgart: Franz Steiner Verlag) そのうち盤王崇拜にかかわる盤王書・盤王歌をはじめとし約二〇〇件を閲覧した。イギリスオックスフォードボードレアン図書館所蔵ヤオ族写本テキストト一四五件を閲覧したが、その中にも盤王歌を確認できた。南山大学人類学博物館所蔵白鳥文書のうち九箱に収められた約一六〇件の北タイのヤオ族写本を閲覧したが盤王歌を複数確認できた。[廣田、二〇一一年、11011a, f.]

『盤王大歌』の構成および内容について詳しく分析が試みられている書籍としては黄海・邢淑芳『盤王大歌—瑶族图腾信仰与祭祀經典研究』貴州民族宗教文化研究叢書、貴州人民出版社、二〇〇六年、鄭長天『瑶族坐歌堂的結構与功能—湖南盤瑶剛介活動研究』瑶学叢書、民族出版社、二〇〇九年がある。

(7) 吉野晃によるとヤオ族にとって焼畑に伴う移住が、神話、儀礼文書、個人的経験のレベルにも共通したものとされ、祖先以来連続と続けら

れてきた「先祖伝来の営為」と認識されており、それは「単なる生業の種別だけでなく、水稲耕作などの定着農耕を営む他の民族と自らを弁別する特徴」ともなっているという。ヤオ族のアイデンティティは移動し続けることを核とし形成されており、当然神話にも反映され移住の経緯が示されている。これは北タイばかりでなく藍山県のヤオ族にも同様に見られ、ヤオ族に共通するといえる「吉野晃、二〇〇一年、二〇〇八」。

(8) 永池健二『逸脱の唱声—歌謡の精神史—』新泉社、二〇一一年、三四二頁

(9) 『古琉球の世界』三二書房、一九八二年、一九六頁

(10) 辰巳正明の解説による。「文学における信仰起源説と恋愛起源説」『折口信夫—東アジア文化と日本学の成立』笠間書院、二〇〇七年、三七〇〜三七二頁

(11) 折口信夫『古代歌謡』『折口信夫全集』第五巻、中央公論社、一九九五年、二五四頁

(12) 『折口信夫事典』かけあいの項の解説による、大修館書店、一九九八年、一〇一頁

(13) 金文京『詩讀系文学試論』『中国—社会と文化』七号、一九九二年、一〇一〜一三六頁

(14) 山本直子『古代歌謡の対句と祭式儀礼』『同志社国文学』六五、同志社大学国文学会、二〇〇六年、一〇一頁

参考文献

神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科

二〇一一年 神奈川大学歴史調査報告第一二集『中国湖南省藍山県ヤオ族

儀礼文献に関する報告』I 神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科

- 二〇二二 神奈川大学歴史調査報告第一四集『中国湖南省藍山県ヤオ族儀礼文献に関する報告』Ⅱ 神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科
- 二〇二四 神奈川大学歴史調査報告第一七集『南山大学人類学博物館所蔵上智大学西北タイ歴史文化調査団資料文献目録』Ⅱ 神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科
- 竹村卓二
一九八一 『ヤオ族の歴史と文化』弘文堂
- 張勁松
二〇〇二 『藍山県瑶族伝統文化田野調査』岳麓書社
- 廣田律子
二〇〇九 『湖南省藍山県ヤオ族の還家願儀礼の演劇性』『中国近世文芸論—農村祭祀から都市芸能へ—』東方書店 九九～二八頁
- 二〇一一 a 『中国民間祭祀芸能の研究』風響社
- 二〇一一 b 『盤王大歌—旅する祖先—』『万葉古代学研究所年報』第九号 万葉古代学研究所 一六七～二六頁
- 二〇一一 c 『資料紹介 文献に見る盤王伝承』『瑶族文化研究所通訊』第三号 ヤオ族文化研究所 六一～七四頁
- 二〇一一 d 『囉哩哩(ルオリレン)の詞章に関する研究』『神奈川大学国際常民文化研究機構年報』二 神奈川大学国際常民文化研究機構 一三五～二四七頁
- 二〇一三 a 『祭祀儀礼に見る旅—中国湖南省藍山県ヤオ族の通過儀礼を事例として—』『旅のはじまりと文化の生成』大学教育出版 二一〇～二四四頁
- 二〇一三 b 『構成要素から見るヤオ族の儀礼知識—湖南省藍山県過山系ヤオ族の度戒儀礼・還家願儀礼を事例として—』『國學院中國學會報』第五八輯 國學院大學中國學會 一～二五頁
- 二〇一三 c 『湖南省藍山県過山系ヤオ族の祭祀儀礼と盤王伝承』『東方宗
- 教』第二二号 日本道教学会 二〇一三年 一～二三頁
- 二〇一三 d 『祭祀儀礼と盤王伝承—儀礼の実施とテキスト—』『瑶族文化研究所通訊』第四号 ヤオ族文化研究所 八八～一〇六頁
- 二〇一三 e 『ヤオ族春節調査』『瑶族文化研究所通訊』第四号 ヤオ族文化研究所 一三三～一三六頁
- 二〇一三 f 『願掛け願ほどの民俗—中国福建省漢族の元宵会と湖南省ヤオ族の還家願儀礼を事例として—』『東アジア比較文化研究』一二号 東アジア比較文化国際会議日本支部 五六～六八頁
- 二〇一三 g 『ポードリアン図書館蔵ヤオ族テキスト盤王関連校訂用資料』『麒麟』第二二号 神奈川大学経営学部一七世紀文学研究会 五八～六八頁
- 二〇一四 『儀礼知識の伝承に関する研究—身体コミュニケーションによる伝承とテキストによる伝承から—』『国際常民文化研究叢書七—アジア祭祀芸能の比較研究—』神奈川大学国際常民文化研究機構 一九九～三〇頁
- 松本浩一
二〇一一 『度戒儀礼に見える神々・興越地方・台湾の民間宗教者の儀礼と比較して』『瑶族文化研究所通訊』第三号 ヤオ族文化研究所 二四～三四頁
- 丸山宏
二〇一〇 『湖南省藍山県ヤオ族伝統文化の諸相—馮栄軍氏からの聞き取り内容—』『瑶族文化研究所通訊』第二号 ヤオ族文化研究所 二一～二二頁
- 二〇一一 『中国湖南省藍山県ヤオ族の度戒儀礼文書に関する若干の考察—男人用平度陰陽撓を中心に—』『知のユーラシア』明治書院 四〇〇～四二七頁
- ヤオ族文化研究所

- 二〇〇九 『瑶族文化研究所通訊』 第一号 ヤオ族文化研究所
- 二〇一〇 a 『瑶族文化研究所通訊』 第二号 ヤオ族文化研究所
- 二〇一〇 b 『ヤオ族伝統文献研究国際シンポジウム予稿集』 ヤオ族文化研究所
- 二〇一〇 『瑶族文化研究所通訊』 第三号 ヤオ族文化研究所
- 二〇一二 『第二届国际瑶族传统文化研讨会——资源与创意——会议论文集』 ヤオ族文化研究所
- 二〇一三 『瑶族文化研究所通訊』 第四号 ヤオ族文化研究所
- 吉野晃
- 二〇一〇 「タイ北部におけるユーミエン（ヤオ）の儀礼体系と文化復興運動」 『東アジアにおける宗教文化の再構築』 風響社
- 二〇一一 「『掛三台燈』の構造と変差…タイ、ラオス、中国湖南省藍山県のユーミエンにおける『掛燈』の比較研究」 『瑶族文化研究所通訊』 第三号 ヤオ族文化研究所 三五～四〇頁
- 二〇〇八 塚田誠之編 「槃瓠神話の創造?—タイ北部のユーミエン（ヤオ）におけるエスニック・シンボルの生成—」 『民族表象のポリテクス—中国南部における人類学・歴史学的研究—』 風響社 二九九～三二五頁
- 二〇〇一 塚田誠之編 「中国からタイへ—焼畑耕作民ミエン・ヤオ族の移住—」 『流動する民族—中国南部の移住とエスニシティ—』 平凡社 三三三～三三三頁
- 李祥紅等
- 二〇一〇 『湖南瑶族奏鑑田野調査』 岳麓書社 七七頁

付記 本稿は、以下の科研費による調査研究の成果の一部である。科学研究費補助金基盤研究（B）〔課題番号 24401018 研究代表者：廣田律子〕、科学費補助金基盤研究（B）〔課題番号 20401013 研究代表者：廣田律子〕。